

初期ハイデガーにおける真理論の端緒

田村未希（東京大学大学院人文社会系研究科）

周知の通り、ハイデガーはその生涯を通じて「存在の問い」を問うことを課題としていた哲学者であるが、その問いは「存在」と「真理」の絡み合いの歴史への問いと表裏を為している。筆者の研究はハイデガーの哲学を知のあり方への問いという観点から描き出すことを目指すものであるが、本発表ではとくにハイデガーの最初期のテキストに依拠し、ハイデガーの独特の真理論が生じてきた端緒を明らかにしたい。

ハイデガーの真理論としてよく知られている『存在と時間』第44節の議論は、トマス・アクィナスの命題論における「真理とは知性と物との合致（相等化）である（*Veritas est adaequatio intellectus et rei.*）」という真理の定義を引き合いに出し、真理の場を判断とする伝統的な真理概念を解体してその根源へと遡行しようとするものである。そして結論としては判断以前に何らかの存在者が開示されている事態を表す「開示性（*Erschlossenheit*）」ないしはギリシャ語の「アレーテア」をドイツ語訳した「非覆蔵性（*Unverborgenheit*）」という概念を根源的な真理概念として提示する。よく知られるように、このようなハイデガーによる真理概念の再定義はとりわけ英米圏の哲学者からは非常に評判が悪く、典型的にはTugendhatからの批判に見られるような、「真理の二値性の欠落問題」が度々議論されてきた。つまり、「存在者の現れそのもの」が真理だとするならば、目の前にある椅子や机も真理であるということになり、何か「真である」ということ自体がナンセンスになってしまうのではないか、という問題である。筆者が明らかにしたいのは、ハイデガーがそのような一見不合理な真理論を展開するに至った動機と、その眼目である。本発表では、ハイデガーが自らの哲学を形成していく中で、どのような仕方でも自らの独自の真理論を形成して行ったのかを明らかにすることを目指す。

近年国内でも最初期のハイデガーの哲学の端緒を巡る研究が数多く出版され、カトリック神学の背景、アリストテレス＝スコラ哲学へのコミットメント、新カント派的認識論の道具立てを用いた中世哲学の再解釈の試みといったハイデガーの最初期の哲学形成にまつわる事情がかなり明確になってきた。ハイデガーが『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』に付した「履歴書」において「私の哲学上の根本的確信は、アリストテレス＝スコラ哲学のそれであった。時が経つにつれ、その内に蓄えられた思想的遺産は、はるかに実り豊かな仕方でも評価され、活用されなければならないし、その必要があるように思われた」と述べている（GA16, S. 38）。アリストテレス＝スコラ哲学的実在論に対する高い評価は1912年の「現代哲学における実在性の問題」等でも確認することができる。とりわけハイデガーは1909—11年に在籍していたフライブルク大学神学部教授のカール・ブライク（*Carl Braig*）の影響を受け、トマス・アクィナスなどの盛期スコラ学ではなく、ドゥンス・スコトゥスやスアレズといった後期スコラ哲学へと接近していく。さらにハイデガーが1922年に執筆した「略歴」では、ブライクを通じてフッサールとロッツェを学んだことが述べられている（GA16, S. 41）。こうしてハイデガーの中で、初期フッサールの現象学、新カント派の妥当論理学、アリストテレス＝スコラ学的実在論という要素が接合されていく。

その成果は1915年の教授資格論文『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』に結実する。そこにおいてハイデガーは新カント派と初期フッサール現象学の発想を手がかりにドゥンス・スコトゥスを解釈して、存在者の一般構造たるカテゴリーそして理論的判断の意味論的身分を確定し、理論的判断が實在に妥当するということ正当化しようと試みる。すなわち、まずハイデガーは、対象が対象として認識される（規定される）限り、主観による規定作用の相関者として存立するという事態に着目する。換言すれば、判断によって規定可能な対象は、与えられた時にはすでに、認識主観による判断の意味妥当に適合しうるように「形成（*Formung*）」されているということだから、すべての認識可能な対象の世界は論理的意味が支配しているのだと主張しようと彼は考えた。この時点でハイデガーの論述を規定しているのは言うまでもなくリッカートらの価値哲学であり、また、論理学の法則を心の働きの還元しようとする心理学主義の立場に対抗する反心理学主義という当時の議論の動向に服している。論理学の諸法則、判断の意味は、判断を行うという実在的な作用の経験的蓋然性からは決して導出できない理念的なものであり、また他方で「その本の表紙は赤い」というような判断の意味は実在する赤さとは違い、永遠的なものでありやはり理念的なものである。判断の真理は理念的なものであり、實在に妥当する判断が真であるとされる。そうして理念的な意味の領域が探求されるべきものであるとされる。

しかしながら、周知の通り、『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』の「結語」において、論理的意味の妥当を根拠づけるとされる「当為」よりもさらに根源的な「生ける精神」の概念が提示されていることが既に萌芽として現れているように、その後この立場は放棄されていく。この立場の変更は、理論的判断とその相関者としての対象の領域は、それ自体が生における或一つの限定された領域であり、生全体を包括するものではないという洞察に基づいている。初期フライブルク期の講義群では、反心理学主義の立場のような理論的判断の意味の理念性から出発する探求とは別の、理論的判断を包摂するような生の領域へと探求を進めていこうとする様子を確認することができる。そのような方向転換の動機となっているのは、簡潔に述べるならば、「理念的なもの」と「実在的なもの」の区別をそれ以上探求することのできない自明なものとして探求の出発点に据えるため、かえってそれらがどのように関係するのかということが説明できなくなってしまう、という問題意識であると考えられる。この問題に関する議論はその後マールブルク期の講義「論理学」などでまとまった形で展開されることになるが、それは初期フライブルク期講義の中で徐々に形成されてきたものである。本発表では、「理念的なもの」と「実在的なもの」をめぐる問題を軸としながら、主としてハイデガーの初期フライブルク期の講義群を手掛かりに、ハイデガーがそれまでの自らの立場について見出した問題を詳細に剔抉することで、彼の独特の真理論の構築の動機と眼目をより先鋭に描き出すことを目指す。